

入門期の高校古典教材

平成元年三月十五日に改訂された高等学校学習指導要領（以下、「新要領」と略す）は、平成六年度より学年進行で実施されている。新要領の第2章第1節、国語に関する部分を見るに、国語科の科目編成は、「現代語」「古典講読」の新設、「古典」から「古典Ⅰ」「古典Ⅱ」への分化により、「国語Ⅰ」「国語Ⅱ」「国語表現」「現代文」とあわせて全八科目となった。古典の専門科目が三つになり、「国語Ⅰ」「国語Ⅱ」をあわせると五科目で古典を学ぶようになったわけであり、このことは十分注目に値しよう。古典重視の方針は、「文化と伝統の尊重と国際理解の推進」が今回の教育課程改訂の根底をなす四つのねらいの一つとして示された（昭和六十二年十二月二十四日の教育課程審議会から文部大臣への答申）ことと連動するものであり、古典科目の複数化もその具体的な措置であろう。古典の授業を国語教

佐藤 勝明

育の中に正統に位置づけることは大切なことであり、選択科目を幅広く用意することも望ましいことではあるが、科目数の増加がただちに授業の活性化につながるわけではなからう。あたりまえのことながら、教材選定や授業方法についての真摯な再検討こそが重要なのだと思われる。本誌前号に「古典指導の視点と方法」と題する拙稿（以下、「前稿」と記す）を發表したのも以上のごとき認識からであるが、とくに教材選定の問題をより具体的に掘り下げるべく、本稿では、「国語Ⅰ」の現行教科書を検討しつつ、入門期古典教材のあり方について考察していくことにしたい。なお、古典が古文・漢文よりなることはいうまでもないが、紙幅の都合もあり、ここでは対象を古文のみにしぼることとする。

一

具体的な検討に入る前に、基本的なことがらを確認しておきたい。

周知のごとく、国語科諸科目のうち文部省が必修科目と定めているのは「国語Ⅰ」だけであり、ほかはすべて選択科目である。古典に関しても、高校生として必ず学ばなければならないのは「国語Ⅰ」においてのそれだけでしかなく、これ以外には古典を学ばずにすませる事例も実際にはあるという。「国語Ⅰ」の古典の授業が、本格的に古典と取り組む最初の機会であると同時に最後の機会でもありうるということは、決して無視できることではなからう。この中で何を学ばせるかは意見の分かれるところであり、たとえば、有名な作品のさわりをいかいつまんで教えればよいといった考え方もあるであろうが、私自身は、作品との対話を通して自己を掘り下げ切り拓いていく授業を作りたいという考えをもっており、教材もそれになうものでなければならぬと考えている。

では、現行の教科書がどうかといえば、次章の入門教材一覧により明らかのごとく、内容よりも読みやすさ・わかりやすさを重視しての選定であると見られる。生徒の抵抗感をできるだけ小さくしようという配慮が働いているのであろうが、これが

望ましいこととは決して思われない。もちろん、読みやすいことは必要条件の一つであるが、充実した内容を伴ってこそそれは意味をもつのであり、単なる笑話のたぐいを読ませることが古典への関心を惹起することにはならないはずである。いうまでもなく、古典を読むことは少なからぬ時間と労力を必要とするのであり、これを補って余りあるものが得られるからこそ古典は読まれ続けているのであろう。私の経験からいっても、生徒が求めているのは本格的な内容であり、読めばわかる単純な笑話や教訓臭の強い話ではないのである。入門教材だからといって、そのことを無視し生徒を軽んじてよいはずはない。本質的な問題と出会い、共感したり反発したり発見をしたり感銘を受けたりしながら、自分の生き方や社会・自然等を見つめ直し、ものの見方・考え方を深めていくことが、おのずと古典への関心を高めることにもつながるはずなのであり、この視点を欠いての教材選定はほとんど無意味であると思われる。生徒にとって充実した内容であることを、入門期古典教材を選ぶ際の最重要条件として指摘しておくことにしたい。

次に、観念性が強いものの、具体的なイメージのわきにくいものも避けるべきと思われる。私の考えでは、情景なり場面なり人物なりがいきいきとイメージでき、それに対する共感・疑問・反発などを軸に作品展開への興味を保持させうるものが望まし

い教材であり、前稿にも記した通り、これらを保証する大前提として、表現や形象のたしかさをあげないわけにもいかないであろう。また、とくに入門期の場合、適度な長さであることも大切なことであり、その中に完結した内容を備えているものが、有効な教材ということになる。よって、その前後の部分や作品全体に関する知識が理解に不可欠であるようなものは避けるべきであり、作品全体の文学史的な意義や評価とも一たん切り離して、その内容自体を吟味しなければならないのである。いうまでもなく、作品としての価値と教材としての価値は必ずしも一致しないのであり、教材としての有効性を問う以上、問題は、授業で扱う部分が生徒にとってどのような意味をもつか、でなければならない。

以上を要すれば、適度な長さと言結性、表現・形象のたしかさ、本質的で普遍的な問題の内在ということになる。以下、具体的な検討にあたっては、これらを主要な基準として各教材の有効性を判断していくことにしたい。

二

新要領に準拠した「国語Ⅰ」の教科書は、13社26点のものが現段階では行なわれている。全体を現代文編・古典編に二分（あるいは現代文編・古文編・漢文編に三分）しているかいないか

の違いはあるが、それらの間の関連に意を払ったものではなく、古典教材に関しても、教科書によってさほど大きな違いは見られない。ここでは、入門教材の現状をとらえるべく、各教科書の古文入門単元にどの教材が採られているか、一覧しておきたい。とくに古文入門単元であることを謳っていない場合は最初の古文単元をあて、教材名はできるだけ略記し、教科書も発行者番号と教科書番号で記した。

1—501 「3 古文に親しむ」

・大江山（十訓抄） ・篁の知恵（宇治拾遺物語） ・小野道風の書（徒然草） ・熟柿と弓取りの法師（古今著聞集）

2—502 「一 説話の世界—古文入門」

・検非違使忠明（宇治） ・竹生島の老僧（古今） ・頼光の郎等（今昔物語集）

2—503 「一 説話に親しむ」

・桜の散るを見て泣く（宇治） ・季武が従者（古今） ・飛び倉（宇治）

11—504 「3 古文(1)」

・生ひ立ち（竹取物語） ・筒井筒（伊勢物語） ・五月ばかりなどに・香炉峰の雪・ありがたきもの（枕草子）

11—505 「古典一」

・生ひ立ち(竹取) ・筒井簡(伊勢) ・香炉峰の雪・あ
りがたきもの・月のいと明きに(枕)

15—506 「随筆」

・榎の木・僧正・五条内裏の化物・法師の学問・高名の本登
り・名を聞くより・花は盛りに・つれづれなるままに(徒然)

15—507 「古典(一一)」

・鳩と蟻(伊曾保物語) ・児のそら寝(宇治) ・阿蘇の

史(今昔)

17—508 「1 古文入門」

・絵仏師良秀(宇治) ・正直にして宝を得たる(沙石集)

50—509 「1 古文入門」

・児のそら寝(宇治) ・ねずみの婿とり(沙石) ・芥川

(伊勢)

50—510 「1 古文入門」

・生ひ立ち(竹取) ・大江山(十訓) ・兵立ちたる者(今

昔)

50—511 「1 古文入門」

・児のそら寝(宇治) ・生ひ立ち(竹取) ・盗人にあひ

てのがるる(今昔)

117—512 「1 古文に親しむ」

・児のそら寝・簗の知恵(宇治) ・生ひ立ち・月からの迎

え(竹取)

117—514 「1 古文に親しむ—説話—」

・絵仏師良秀(宇治) ・大江山(十訓) ・馬盗人(今昔)

142—515 「1 古文入門」

・児のそら寝(宇治) ・生ひ立ち(竹取) ・門出(更級

日記)

142—516 「2 古文の世界」

・母子猿(古今) ・菖蒲・月(枕) ・山吹の花(常山紀

談) ・ゆく河の流れ(方丈記)

143—517 「古典(一一)」

・こぶとり(宇治) ・虫は・七月の日の若菜・うつくしき

もの・近うて遠きもの・遠くて近きもの・月のいと明きに

(枕) ・梓弓(伊勢) ・門出(更級) ・百人一首より

143—518 「古典(一)」

・鹿の声(大和物語) ・星取り棹(醒睡笑) ・絵仏師良

秀(宇治) ・東下り(伊勢)

153—519 「古文入門」

・児のそら寝(宇治) ・安養の尼の小袖(十訓) ・鳩と

蟻(伊曾保)

172—520 「古文入門」

・記憶のこと・治療のこと(花月草紙) ・雪のおもしろう・

公世の二位のせうと・悲田院の堯蓮上人・丹波に出雲といふ所（徒然）

172―521 「古文入門編」

・虫めづる姫君（堤中納言物語） ・絵仏師良秀（宇治）
百虫賦（鶉衣）

175―522 「三 古文入門」

・安養の尼の小袖（十訓） ・ねこの子のこねこ（宇治）
羅城門（今昔） ・筒井筒（伊勢）

175―523 「古文入門」

・大江山（十訓） ・獵師仏を射る（宇治） ・良峰宗貞の
出家（今昔）

175―524 「古文に親しむ―古文入門―」

・児のそら寝（宇治） ・つれづれなるままに・弓射ることを習ふ・丹波に出雲といふ所・仁和寺にある法師（徒然）

183―525 「古文入門」

・姫君と若物（古本説話集） ・仁和寺にある法師（徒然）

183―526 「古文入門」

・児のそら寝（宇治） ・生ひ立ち（竹取）

183―528 「古文入門」

・児のそら寝（宇治） ・虫めづる姫君（堤）

以上のごとく、圧倒的に説話系統のものが多く、随筆類、日記・物語類がこれに続いている。具体的には、「児のそら寝」（宇治拾遺物語）を入門教材に採っている教科書が9点、「生ひ立ち」（竹取物語）が6点、「絵仏師良秀」（宇治）と「大江山」（十訓抄）が4点、「筒井筒」（伊勢物語）、「虫めづる姫君」（堤中納言物語）、「門出」（更級日記）、「鳩と蟻」（伊曾保物語）、「簗の知恵」（宇治）、「安養の尼の小袖」（十訓）、「ありがたきもの」（月のいと明きに）、「香炉峰の雪」（枕草子）、「つれづれなるままに」（仁和寺にある法師）「丹波に出雲といふ所」（徒然草）が各2点といった状況である。以下、説話、随筆、日記・物語の順に、それぞれのもつ意義と問題点を検証し、入門教材としての適否を判断していくことにしたい。

三

入門期に説話教材が数多く取りあげられているのは、読む上での抵抗感が小さく、比較的容易に古典の世界に入っていけるという判断によるのであろう。たしかに、説話には古典であることをさほど意識せずに読めるものがあり、適度な長さ、話の完結性という点でもとくに問題はない。また、人間をいきいきと描いている点でも、説話を読む意義は十分に認められてよい。とすれば、残る問題は、生徒に訴えかけるに足る内容を備えて

いるかどうかである。

もつとも多くの教科書に載る「児のそら寝」を組上にあげ、具体的に考えてみよう。比叡山の僧房の一夜の逸話として一篇は完結しており、理解のために『宇治拾遺物語』についての知識を必要としないことはいうまでもない。話の筋は明瞭であり、会話を中心とした展開も臨場感を高め、児の様子や心の動きも具体的なイメージをもって理解することができる。そして、その一部始終が人間というものの一面を照射していると見て見られなくはないのであるが、実際の印象は末尾の「僧たち笑ふこと限りなし」に収斂されてしまい、生徒に深い何かを与えうとは思われない。もつとも、入門期に肝要なのは生徒が異和感なく古典の世界に入っていけることであり、内容的なことを問題にする必要はないという考え方もあるであろうが、それが本当の意味で生徒を古典に誘うことになるのであろうか。くり返すことになるが、「読んでよかった」と思える教材を提示するのでなければ、大きな労力を払ってまでして古典を読もうという気にはならないはずである。結局、「児のそら寝」は教材としては不適当といわざるをえず、ほかの多くの説話教材の場合も同然であると思われる。

先述した通り、人間をいきいきと描く点で説話には説話特有の魅力があり、それは十分に認められなければならないが、教

材としても有効であるかどうかはまた別の問題であり、生徒に感銘を与え、生徒を深い思考に誘うる内容をもっているかどうかの吟味を経ずに、読みやすさを優先して説話を入門教材に多用するのは誤りといわねばなるまい。有効な教材ということでは、たとえば「母子猿」(古今著聞集)のような作品がそれにあたると思われる。一篇は、猿を射ることを好む男が母猿と子猿の情愛にうたれてこれを改めるといふものだが、母子猿の恩愛に満ちた姿は、何ら説明を要せずにしみじみとした感慨をいだかしめ、それは翻って生命の尊さを実感させることにもなると思われる。これに比して、「馬盗人」(今昔物語集)や「絵仏師良秀」(宇治拾遺物語)などは、ともに人間を描いて興味深い作品ではあるが、普遍性という点では欠けるものがあるようである。前者は、展開自体に読者をひきつけるものがあり、内容面でも父子の無言の内の意志の疎通には感嘆すべきものがある。が、実際の授業では、それは武家社会のある父子像に対する驚嘆であるにとどまり、普遍的な問題としてとらえさせるには無理があるようである。後者も、主人公の異常なまでの執念は読む者の関心を喚起するに十分であり、一事に没頭する人間の姿としてそれをとらえることも不可能ではないが、全体を通しての印象は、やはりある強烈な生き方に対してあきれ驚くにとどまり、作品と自己を対峙させつつ読むという方向には向か

わない。結局、説話としての魅力が必ずしも教材としての有効性を保証するとは限らないということであろう。

以上、説話の魅力を視野に入れつつ、その教材化にあたっての問題点をさぐってきたが、総じて入門期に説話教材は適当でなく、とくに「児のそら寝」などの笑話類は避けるべきとの結論に達した。有効と認められる作品も散見される以上、教材探索の努力は続けられるべきであるが、それらも入門期よりは「古典講読」などで読み重ね、その総体としての説話の魅力にひたらせ、人間のあり方の諸相をとらえさせるのが上策であろう。ともあれ、入門期イコール説話という安易な発想だけは、何としても改められなければなるまい。

四

次に、随筆類は入門教材としてどうか。『枕草子』『方丈記』『徒然草』などが文学的にすぐれていることはいわずもなであるが、ここでも問われるべきは教材としての意義であり、とくに全員必修の「国語Ⅰ」の入門教材として扱う際の有効性である。分量的には適当なものが多く、表現・形象の面でも完結性という点でも問題はないかのごとくであるが、観念性の強いもの、単独で扱うのに疑問の余地があるものもないとはいえない。たとえば、『方丈記』の冒頭は無常観を表した名文として

知られるが、これは以下の具体的な災害描写との併読を前提に書かれたものであり、これだけを切り離して授業で扱う意義は薄いといわねばならない。『徒然草』の序段にしても、兼好の執筆の姿勢がうかがわれるものとしては意義があり、まとまった形で同書を読む中で扱うのはよいとしても、入門期に読ませる必要はまずないであろう。随筆の場合も、その教材自体が生徒にとってどのような意味をもちうるか、が第一に問われなければならないのである。

また、『枕草子』『徒然草』などでは、さまざまな傾向の章段が混在していることにも意を払わなければならないであろう。私見では、エピソード紹介的なものと筆者の意見が全面的に出ているものと大別できると思われるが、前者の場合、教材としての適性には欠けると思われるものも少なくない。『徒然草』の「仁和寺にある法師」を例にあげると、石清水での法師のエピソードを理解させることはさほど難しくなく、それを末尾の「少しのことにも先達はあらまほしきことなり」という感想に結びつけて理解させることで、一応の納得（知的満足）を与えることは可能であるが、それ以上に学習が深められることは期待できない。「丹波に出雲といふ所」も、展開自体には興味をそそめるものがあり、上人の言動の中に、さかしらゆえにありのままのものごとを見ることができなくなった人間共通の問題点を見

いだすことも不可能ではないが、実際の印象としては、權威ある人間の失敗という側面が強く浮かびあがることになってしまう。『枕草子』の「香炉峰の雪」の場合、中国文学と日本文学の関わりを示すよい例であること、以後の文学作品に種々の影響を与えてきたことは無視できないが、教材としては、一つの知的なエピソードとして理解されるにとどまるのではないかと思われる。総じて、エピソード紹介的な章段に読みの拡がり・深まりを求めるのは困難という結論になりそうである。

後者の例としては、『徒然草』の「花は盛りに」を取りあげてみよう。まず、冒頭のやや意表をつく問題提起は、読み進めるための動機づけとして十分であろう。ここに明示された筆者の考え方は、共感するにせよ反論するにせよ、自分の問題としてとらえ直しつつ読まなければ正確に理解できない種類のものがあり、そのことは教材としてきわめて重要な要因といえる。前半はやや観念性がまさるが、後半の祭礼見物の部分は具体的であり、読者はその場面をイメージさせつつ前半でとらえた筆者の理念なり美意識なりを再確認することができるのである。こうした教材を用いることにより、単に内容を理解して終わらせるのではなく、自分に問いかけ、考え方を鍛えていく授業も可能になると思われる。が、そのためには、文章から浮かびあがる人間観なり世界観なり自然観なりと自分のそれとをつきあわ

せていくことが不可欠であり、また、それが古典の授業で随筆を扱う意義を保証することにもなると思われるが、入門期としてはかなり高度な授業ということになる。結局、随筆類は、自己と対峙させつつ読むことが可能な教材を厳選し、二年次以降にある程度まとめて扱うのがよいのではないだろうか。

五

そこで、残る検討対象として日記や物語が浮かびあがることになる。

まず、日記については、『蜻蛉日記』でも『更級日記』でも、筆者の人生を追う形で読むことが有意義であることはいうまでもなく、選択科目などでの通読がもっとも効果的と思われるが、その部分だけ独立させても十分に有意義な箇所がないわけではない。たとえば、前稿でも取りあげた『蜻蛉日記』の「心憂き世」などは、内容の迫真性・普遍性・完結性などの諸点から見てすぐれた教材と判断される。が、入門教材としてどうかといえば、内容理解の過程である種の試行錯誤が必要であり、そのことが生徒の思考力・判断力を伸ばすことにもなるのであるが、入門期に扱うには無理があろう。入門教材としても採られる『更級日記』の「門出」の場合、日記の冒頭という枠をはずしても独立したものとして読め、古文の読み方をつかむのに適してい

る点、内容的にも、若き日の一途な思いという共感すべきものを備えている点で、入門教材としての意義は一応認められるが、生徒が切実な思いで受けとめるほどの内容とはいえないようである。私の経験からいえば、この教材は、『源氏物語』を読む導入に用いるのが最適であるように思われる。ともあれ、現在のところ、入門期に適した日記教材は見いだしていない。

物語では、『竹取物語』と『伊勢物語』が入門教材として比較的多く取りあげられている。どの部分が何点の教科書に採られているかといえば（上が入門単元での採用数、下は「国語Ⅰ」を通しての採用数）、

『竹取物語』

・ 生ひ立ち	6	13
・ 火鼠の皮衣	0	1
・ 竜の頸の玉	0	1
・ 月を見て嘆く	0	1
・ 昇天（月からの使者）	1	6
・ ふじの山	0	1

『伊勢物語』

・ 月やあらぬ	0	2
・ 芥川	1	7
・ 東下り	1	10

・ 筒井筒	2	10
・ 梓弓	1	4
・ すける物思ひ	0	1
・ 交野の桜	0	1
・ 小野の雪	0	2
・ さらにぬ別れ	0	1

といった状況である。「かぐや姫の生ひ立ち」が重んじられていることは明白であるが、これは物語の発端として読んでこそ意味のあるものであり、これだけを単独で、あるいは「生ひ立ち」と「昇天」だけを取り出して読むことが有効であるとは決して思われない。『竹取物語』の豊かな魅力は、全体を読み通すことによって知られうるものであり、やはり選択科目で集中的に扱うべき作品といえよう。

『伊勢物語』の場合、その部分だけ取り出しても十分に完結した内容を備え、形象や内容の面でも教材に適していると認められるものが少なくない。もともと、「初冠」などは、平安貴族の行動理念を理解する上では有意義であろうが、若き都人の「いちはやきみやび」ぶりが生徒にとってどのような意味をもつかといえは首をかしげざるをえず、教材化にあたって慎重な検討が必要であることはいうまでもない。惟喬親王に関する章段も、『伊勢物語』の中でしめる位置を無視して純粋に教材として見た

場合、強く生徒に訴えかける内容であるとはいいたい。やはり、『伊勢物語』の最大の魅力は、かつて佐藤春夫が「わたくしはこれを歌書としてよりも青春の書として恋愛教科書と見るやうになった」(日本古典文学大系月報6)とのべたように、愛の諸相をいきいきと描く点にあると見られるのであり、教材としての『伊勢物語』を考える上でも、そのことを無視するわけにはいかないであろう。結論的にいえば、たしかに愛を描いた章段には教材として有効なものが多く、とくに「筒井筒」と「梓弓」はきわめて有意義な教材であると認められる。「筒井筒」については前稿にも記したので詳述しないが、『大和物語』の百四十九段と比較しても、これがみごとに普遍性を獲得していることは明らかであり、成立的にこれが数種の物語の合成であることもほとんど問題にはならないであろう。私自身の経験からいって、入門期においても深い思考を保証しうる授業は十分に可能であり、生徒は、表現に即していきいきとしたイメージを作りながら、共感し、反発し、大きな疑問と向き合い、自分との対話をはじめ、「古文は、読むのは大変だがおもしろい」との感想を聞かせてもくれるのだった。これに對して、「東下り」の場合、主人公の境遇が明らかでないこともあり、生徒はその悲哀を切実なものとして実感することができず、作品と対話しつつ読む授業を成立させることは困難であった。「芥川」の場合、

後半の種明かしが教材としては完全に余計であるが、これなしでは唐突すぎる結末に驚いて終わるしかなく、いずれにしても、思考や批評を生み出す授業を組織するのは困難と思われる。同じく悲劇的な結末を扱ったものでも、「梓弓」の場合、指の血で辞世を書いて息絶えた女の最期はあまりにも鮮烈なイメージを残すことになり、内容的にも、男女それぞれの行動は各自にその可否を考えさせずにはおかぬものであり、大きな問題を内包しているといつてよからう。『伊勢物語』を通読しても、「筒井筒」と「梓弓」の教材としての有効性は群を抜いており、これらを入門期に取りあげることが、生徒を古典の世界に誘う上でも効果的であると判断される。

このほか、2点の教科書に載る『堤中納言物語』の「虫めづる姫君」についても一言しておきたい。世間一般の常識や通念あるいは世間体といったものに惑わされることなく、自然本来のあり方を愛し、自己の信念を貫く主人公の姿は注目されるものであり、自己確立期にある生徒たちにとっても有意義な作品であると思われる。が、ともすれば、虫への偏愛という内容の特殊さが生徒の共感を阻み、一種の奇談として読み流されてしまふおそれもないわけではない。古典の授業で生き方を考えさせることのできる珍重すべき教材ではあるが、その扱いには注意が必要ということになるう。

六

現行の教科書を通観し、教科書としての性質上、各学校の取舍選択に応じるべく諸種の教材を用意せざるをえないという事情は考慮に入れるとしても、私の基準に照らして、入門教材としての適切さに欠けると判断されるものが多いことに驚かざるをえない。もちろん、私の設定した基準そのものが片寄っており、古典の魅力をきわめて限定的にしか見ていないという批判もありうるであろう。しかし、私がのべてきたことは、授業というやや特殊な場で、しかも「国語Ⅰ」という全員必修の科目において、どうしたら古典の授業が活性化するかということを前提としているのであり、一般的な古典との付き合い方を念頭においているのではもちろんない。時間と労力をかけて古典を読むことを求める以上、それに見合うすぐれた教材を提示するのであれば、その学習がおもしろいものになるはずはない、というのが私の基本的な考え方である。古典作品の中に、時代や社会や感覚の違いを超えてなお鋭く迫ってくる本質的な問題が内在していることに気づき、それを自分の問題としても考えはじめた時、「何のために古典を読むのか」という多くの生徒の胸をよぎるであろう疑問も、半ばは解消されているのではないだろうか。

本稿は、そうした授業のための具体的な教材検討を目的としたものであるが、これまでのものに代わる有意義な入門教材が見いだせないでいる現段階では、『伊勢物語』の「筒井筒」「梓弓」が入門期にもっとも適した教材であるという結論になる。授業方法について詳述する余裕はないが、くり返し音読させることにより、何がわかり何がわからないのかをはっきりさせ、ことばを手がかりに少しずつ前後のつながりをつけさせていくことは、入門期でも決して不可能なことではない。生徒の感じたことを大切に拾いあげ、皆で考えながらこれを理解に結びつけさせていくようにすれば、おのずと大きな問題に向き合うことにもなり、つねに豊かなイメージ化を行なわせることにより、その問題が自分たちとは無縁の遠い世界のものではないということにも気づいていくのである。もちろん、その過程において、現代文と古文の表記・語彙・文法等の違いにも気づくであろうし、和歌の働き、ひいては、ことばのもつ力に思い至ることもなるであろう。「筒井筒」などは十分そうした授業を可能ならしめる教材であり、じっくり時間をかけるに足る成果は得られるものと確信される。

「筒井筒」「梓弓」からはじめ、以後どのような教材配列をすればよいか、今後の課題として考えていくことにしたい。

（本学専任講師）